

魂身医学への維新

後山 尚久（大阪医科大学健康科学クリニック）

心身医学の実践者は例外なく、心身二元論では出口を見出せない病者を前にして、漢方医学でいう「心身一如（または身心一如）」の医療を試みているであろう。この心身一如にはスピリチュアルな一面も含み、古くから東洋の医療は、心から、身体から、社会的な面から、人との関係性の面からというさまざまな要素を一体化した、多面的対応を行ってきた。現在のわが国の心身医学のモデルは bio-psycho-socio-eco-ethical medical model が提唱されているが、このモデルはまさに漢方医学で扱うものである。

古くから東洋では禅、瞑想、気功、ヨガなどが広く湯液医療や鍼灸を支えるものとして実践されており、その有効性は 21 世紀の今でも色褪せるものではないことは周知である。日本伝統医療は、病者の個人的な病態と体質色に合わせた生薬の絶妙の配合による治療薬を中核にして、上記のような補助医療を被包物として駆使する、優れたホリスティックメディシンである。

現代のわが国の心身医療は、心の問題の身体への反映という方向性からのアプローチのみではさまざまな病者の治療として十分なカバーができないことは一度真剣に心身医療に携わった医師のすべてが抱く印象である。

心は身体であり、また身体は心である。それらはひとりの人間の中では全く同一の中にあるため、心身医療は直接身体に効くものであり、また同時に心模様や思考パターンにも効くものである。著者は産婦人科出身の医師であるため、女性の生涯に亘る健康生成、疾病予防には、女性の心と身体を社会とのつながりを有機的に組み入れた形で統合的に扱い、東西両医学

を効率的に編み合わせた医療の提供の必要性を唱えてきた¹⁾（図1）。

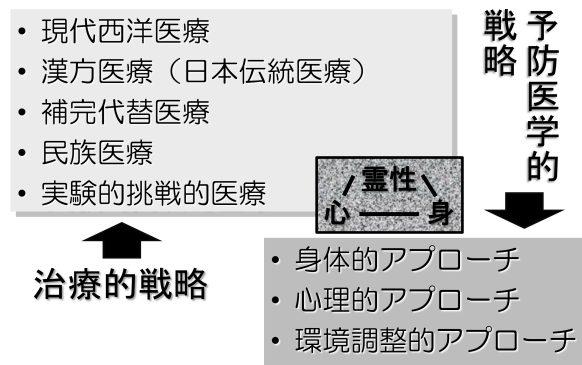


図1 女性の疾病予防・治療による健康回復（文献¹⁾より引用、一部改変）

本研究会理事長・深尾篤嗣先生は「身は客観的身体のみならず、主観的身体、および間主観的でスピリチュアルな深層意識身体までもを包含する成層的な統合体である」という考えを心身医学雑誌で述べておられる²⁾。その論述の中で、現在のわが国の心身医学はスピリチュアルな次元を含めた次の段階の医学への進化が望まれ、心身医学から魂と身の相関も考慮しながら病者の全体像を把握できる「魂身医学」へのパラダイムシフトを提案された。それは深尾篤嗣先生のプロセス指向心理学への深い造詣と日頃の病者に寄り添った医療の姿勢³⁾から導き出された結論ではないかと思われる。

著者が漢方医学の研究・臨床に携わって四半世紀が過ぎたが、日本の伝統医学である漢方は江戸中期に、病者を苦しみから救える実効性のある優秀な医療としてほぼ完成した。その後西洋医療とのハイブリッドによりさらに“治せる医療”としてのわが国の医療の形がある。漢方医学の理論のひとつである五臓六腑論は「肝：魂」、「肺：魄」、「脾：意、思」、「腎：志」、「心：神」という概念で構成されており、スピリチュアリティの要素がそこには厳然と存在していることがわかる⁴⁾（図2）。ウィリアム・オスラーのいう“医療のアート”と呼ばれる部分と重なる領域であると思われる。

人は生き物であるから物質としての仕組みを持つが、スピリチュアリティも有する精神活動を備えた動物として時間を過ごすため、深尾篤嗣先生が言われるように、心身医学は生物医学のパラダイムから脱し、精神、身体、霊性を統合した“魂身医学”にシフトするべき時を迎えたのである。

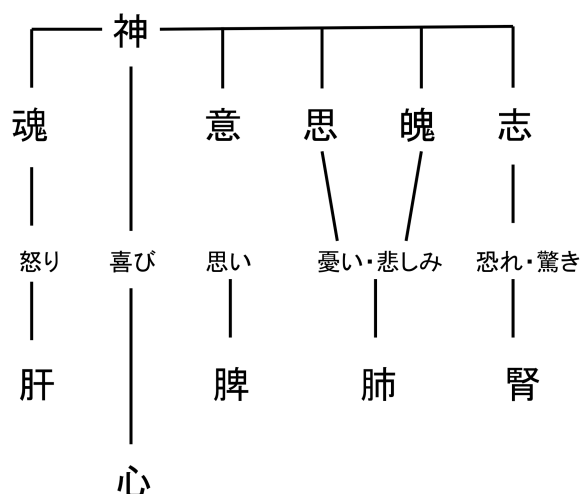


図2 漢方医学の五臓六腑論にみるスピリチュアリティ要素（文献⁴⁾より引用）

文 献

- 1) 後山尚久: 女性の健康と医療—これからの医学研究に期待するもの—, 女性健康科学研究会誌 1: 24-27, 2012
- 2) 深尾篤嗣: 心身医学維新, 心身医学 48: 259 (巻頭言), 2008
- 3) 深尾篤嗣, 藤見幸雄, 後山尚久, 中井吉英, 花房俊昭: 身体症状、夢、人間関係—すべては気づきを促すサインである！—プロセス指向心理学が有効であった身体表現性障害患者の1例—, 心療内科 12: 486-492, 2008
- 4) 後山尚久: 漢方医学にみるスピリチュアリティ—五臓六腑、気血水概念からながめる心身—, 心身医学 50: 383-386, 2010

（教育講演 座長／司会）

編集・制作協力：特定非営利活動法人 ratik

<http://ratik.org>

